

端野農業の移り変わり(その1)

今回から、端野の基幹産業である農業の礎を築いた「水稻」と「ハッカ(薄荷)」の移り変わりについて記します。

屯田兵入地当時の主要な作物は、
麦類、じゃがいも、そば、豆類

屯田兵が入地した明治三〇(一八九七)年に、どのような作物が作られたのかについては、記録がなく不明ですが、屯田兵移住給与規則により、次のような種子が各戸に支給されました。

- 大麦 一斗(約一五キロ) 大豆 一斗 小豆 五升(約七・五キロ) じゃがいも(馬鈴薯) 四斗(約六〇キロ) 麻種子 一斗 蚕卵紙 四枚半

この支給された種子等は、自給自足に必要と考えられる種類のものでした。

麻種子、蚕卵紙は衣料の自給を考えたものであったと思われませんが、一部で試みられたものの成功せず定着しませんでした。しかし、養蚕が一部の地域で行われていたことを証として、三区地区に昭和末期まで

常呂郡農作状況(道観業年報、明38年)

作目	作付面積	収量	反収
粳米	0.7町	1石	14石
大麥	432.5	5710	1.32
小麥	270.0	2850	1.05
えんばく	380.0	4800	1.52
あわ	124.0	2338	1.88
え	2.9	29	1.00
いなぎび	1.6	24	1.50
とうもろこし	366.8	5368	1.46
そば	28.9	333	1.15
大豆	51.4	507	0.98
小豆	127.8	1122	0.88
えんどう	63.8	638	1.00
さいとう	13.5	160	1.18
馬鈴薯	80.5	644	0.80
大ごぼ	136.6	339,000	248
人参	9.0	22,500	250
きゃべつ	4.7	12,690	270
牧草	4.0	10,000	250
なたね	0.5	60,800	1216
はっか	0.5	3t	0.6t
そらまめ	20.0	300石	1.50石
玉ねぎ	271.8	190,260	(茎量)70
えご	0.5	6石	1.2石
大藺	1.8	5526	307
(い)	—	—	—
	5.9	1700	29
	0.1	100	100

農家戸数明治38年の常呂郡は1014戸

大隊長に就任した三輪光儀中佐は、土地条件や耕地の状況からみて稲作が可能と判断し、屯田兵本部の方針に反することになりますが、将来の造田に備え不可欠な用水確保のために大規模な灌漑溝の開削を決断しました。この決断に対し、網走支庁長は賛同し、土木技師を現地に派遣し幹線の実測をさせ、開削の具体的な方向を三輪大隊長に報告しました。この報告書により確信を持った三輪大隊長は、冬期間の農閑期を

「桑の木」がありました。

作付けについては、隊から割り当てる指示はなく自由に作付けでき、屯田兵入地当初に作付けされたものは、主食用として麦類とじゃがいも、そばが中心であり、米の代わりに「稲きび」が作られたようです。また、大豆や小豆も作付けされましたが、収量が少なく豌豆や金時などの菜豆類がつくられるようになった、と、端野村史(昭和二二年編集)に記されています。また、麻はあまり普及しなく、大正期に入り麻に代わり「亜麻」が作られるようになりました。豆類は、自家用の味噌のほかは販売しましたが、当時、商社は網走にしかなく、馬の背に何俵かの豆類を背負わせ、冬は馬糞に積んで運んだといわれています。屯田兵の兵役解除となる明治三六(一九〇三)年頃までは、麦類、じゃがいも、そば、

豆類が主要な作物で、自給自足の農業でした。なお、当時の作付けに関する資料がありませんので、参考までに、明治二八(一九〇五)の常呂郡全体の農作物の作付状況を左に添付しました。

大灌漑溝の開削

屯田兵が野付牛原野に入地した当時、北海道内には約五七〇〇ヘクタールの水田がありました。網走支庁管内はわずか一・六ヘクタール(〇・六ヘクタールという記録もあります)にすぎませんでした。

野付牛屯田兵村での開拓にあたっては、新開地の開墾を第一とし、造田についてはこれに要する経費負担が開墾に支障をきたすという理由から、当分の間は禁止されていました。同三一(一九〇八)年、二代目屯田歩兵第四

利用し、同三四（一九〇一）年一月下旬から第一中隊から第三中隊の屯田兵全員を出動させて実施に踏み切りました。

この灌漑溝水路は、現在の北見市留辺薬町宮下町の無加川の一角から、第三中隊（相内）、第二中隊（野付牛）を経て第一中隊一区（現在の端野町一区）の常呂橋（現豊稔橋）を経て常呂川に注ぐ、全長八里（約三二キロ）の大灌漑溝でした。なお、この屯田灌漑溝図は、左図のとおりです。

開削工事は、一月下旬から翌年一月下旬まで、年末年始の期間を除いて連日屯田兵全員が出動し、工事にあたりました。厳冬期には地面が凍結し、手作業での掘削は容易でなく、時には吹雪と戦い幾多の困難を乗り越り切り完成しました。

二カ月余の短期間で完成したことは、屯田兵としての使命感、そして、米づくりにかけ強い思いがあったからこそと思います。

北見地方における米の試作

北見地方の稲作の起源については、網走支庁誌に「明治二三年（一八九〇）年が稲作の最初である」記され、単に網走郡の者となっており、当時の移民の分布状況からみて、試作地は網走湖畔の泥湿地帯であったと考えられています。

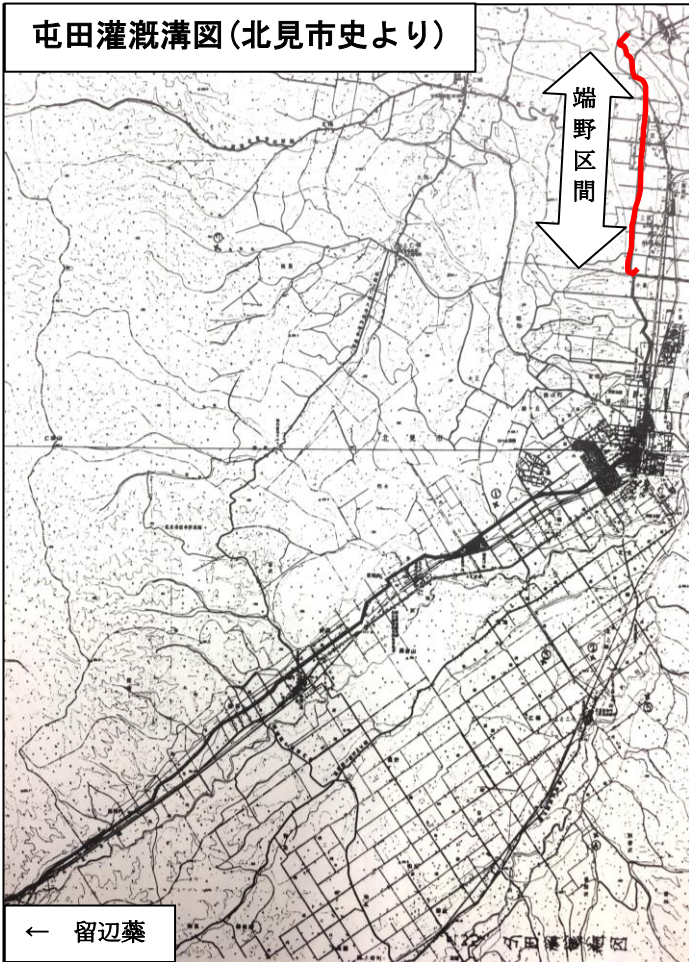
しかしこれを立証する資料はありません。明治二六（一八九三）年、道立上白石稲作試験場が開設され、同二九（一八九六）年に、

年、道庁の委託により前田駒次氏が現在の北光社の一角で試作を始め、同二九（一九〇五）年まで継続したが実を結ばなかった、と、北光社開拓九〇年のあゆみ（昭和六一年発行北光社九〇年記念事業協賛会）に記されています。

また、端野地区では、「本村の水稲は明治三四年、村田善作氏の試作を以て嚆矢とす。氏は連作せるも収穫を得ず。」と端野村史（大正一五年発行）に記されており、また、端野町三区（三区屯田農村生活センター横）に、「端野町水田発祥の地」の記念碑が建立されており、この地は自然水と湿地帯があり試作に適した地でした。碑文には「端野町の稲作は、明治三一年から柿下長松がこの地で試みたのが最初と伝えられている。その試みは実を結ばなかったが米づくりへの情熱は、その後も脈々と受け継がれ、今日の端野の稲作が結実した。」と、刻まれています。

参考文献

- 端野村史（大正一五年発行）
- 端野町水稲のあゆみ（昭和五四年発行）
- 端野夜明け第一集（昭和六二年発行）
- 新端野町史（平成一〇年発行）
- 農協五〇年史（平成一〇年発行）
- 水路一途・北見土地改良区の歩み（平成二一年発行）



網走郡役所内に稲^{いね}作が配布され嘱託試験が行われており、このことについて、北見産米二五万石祝賀記念碑「北見の米」に、「明治二九年に斜里村鉤寒別で札幌赤毛を栽培したと、記されておりこれが北見地方における最初の試作であったといえそうです。北見地区内での米の試作は、明治三〇（一八九七）年、クネネップ原野に入地した北光社農場で、同三一（一九九八）